（大豆生育情報－１）

令和４年産大豆の生育状況および病害虫防除について

令和４（2022）年８月 19 日
那須農業振興事務所

・開花期は、平年より３日程度早まりました（本年：8/2、平年：8/5）。
・べと病やカメムシ類が発生しているほ場があります。薬剤散布により防除を徹底しましょう。

１　生育概況

生育調査結果（8/4 調査）

調査地点	播種日	開花期	主茎長（cm）	主茎節数（節）	分枝数（本）
大田原市河原	6/20	8/2	62.4	11.9	2.2
大田原市実取	6/20	8/2	65.8	12.1	2.4
【参考】栃木県農業試験場（宇都宮）	6/26	8/5	64.9	13.5	5.1

・６月の降水量は平年より少なく、梅雨明けが早かったことから適期に播種が行われ、昨年産のような播き遅れはみられませんでした。
・平年より３日程度早い８/２頃に開花期を迎えました。
・生育は順調に進んでいますが、べと病やカメムシ類が発生しているほ場があります。適期の薬剤散布により防除を徹底しましょう。

大田原市河原（8/4 時点）

大田原市実取（8/4 時点）

【参考】気象概況

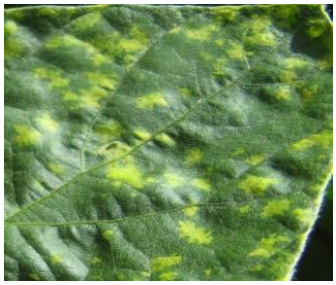
アメダス地点	時期	気温（℃）			降水量（mm）		
		本年	平年	平年差	本年	平年	平年比（%）
大田原	６月	21.1	20.0	**+1.1**	156	172	**90**
	７月	25.6	23.5	**+2.1**	208	236	**88**
黒磯	６月	19.9	19.1	**+0.8**	98	175	**56**
	７月	24.3	22.8	**+1.5**	307	255	**121**

２　病害虫防除について

（１）べと病防除

①べと病の特徴

べと病は、比較的冷涼で雨が多いときや、茎葉が茂り過ぎて風通しが悪い場合に多発します。病徴は主に葉と子実に現れ、葉が侵されると、淡黄白・円形の小斑点を生じ、次第に融合して不整形の褐色病斑になり、早期に落葉します。子実が侵されると、表皮が乳白色から黄褐色のカサブタ状になり、粒の大きさが健全粒に比べて小さくなるため、**収量・品質の低下につながります。**また、べと病の病原菌は、子実や被害茎葉で越冬し、伝染するため、昨年発生がみられたほ場では防除を徹底しましょう。


葉の病斑

子実の病斑（発生初期）

子実の病斑（発生後期）

②対策

ア　開花１０日前から子実肥大初期において予防的に薬剤防除を行う。
（６月下旬播種の場合、**７月下旬から８月下旬頃までが防除時期**です。）

イ　開花前にべと病が発生した場合は、茎葉に薬剤を散布する。

ウ　発生が拡大する場合は、開花４０日後までに追加防除を行う。
（６月下旬播種の場合、**９月上旬頃までが防除時期**です。）

べと病防除に登録のある主な薬剤（令和４（2022）年７月 28 日現在）

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	散布 （100～300L/10a）	収穫21日前まで	２回以内
アミスター20フロアブル	2000倍	散布 （100～300L/10a）	収穫７日前まで	２回以内
ザンプロDMフロアブル	1500～2000倍	散布 （100～300L/10a）	収穫７日前まで	３回以内
	８～16倍	無人航空機による散布 （0.8～1.6L/10a）	収穫７日前まで	

※アミスター20 フロアブルは耐性菌が発生しやすいので隔年使用とし、使用する場合、同一年における使用回数は１回とする。

（２）カメムシ類防除

①カメムシ類の特徴

大豆の吸実性カメムシ類は、成虫・幼虫ともに子実を直接吸汁加害します。加害期間は子実肥大期間を通じて長期に渡ります。子実肥大初期の加害では、子実の肥大不良や変形等による減収や品質低下を生じます。一方、子実肥大中後期の加害では、吸汁による変形・変色した被害粒が発生するため、機械での選別・除去が難しくなり品質が大きく低下します。適期の薬剤散布により防除を徹底しましょう。

イチモンジ
カメムシ

アオクサ
カメムシ

ホソヘリ
カメムシ

カメムシ類による
被害粒（肥大後期の被害）

②対策

開花期の 15 日後に１回目の散布を行い、その後 10～14 日おきに３～４回薬剤を散布しましょう。９月上旬から中旬は水稲の収穫作業と重なりますが、この時期に防除を怠らないことが重要です。

カメムシ類の防除体系（適期播種（6/15～7/5）の場合）

散布回数	開花後日数	時期	生育ステージ
１回目	15日後	８月中旬	莢伸長期
２回目	25日後	８月下旬	子実肥大初期
３回目	40日後	９月上旬	子実肥大中期
４回目	50日後	９月中旬	子実肥大後期

カメムシ類防除に登録のある主な薬剤（令和４（2022）年７月 28 日現在）

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
スミチオンベルクート粉剤DL	ー	散布 （3kg/10a）	開花期～若莢期 但し収穫21日前	4回以内
トレボンEW	1000倍	散布 （100～300L/10a）	収穫14日前まで	2回以内
スミチオン乳剤	1000倍	散布 （100～300L/10a）	収穫21日前まで	4回以内

３　高温対策について

関東甲信地方１か月予報（令和４年８月11日気象庁発表）では、向こう１か月の気温が高い確率が50%となっています。高温による被害が懸念されるため、以下の技術対策により高温の影響を軽減するよう努めてください。

（１）開花期は、土壌乾燥の影響で花数減少が懸念されるため、暗渠が施工してある水田では暗渠の排水弁を閉める。
（２）１週間以上晴天が続き、頂小葉が立ち上がり反転して見えたら、畦間かん水を行う。なお、排水の悪いほ場は湿害発生の危険があるので、かん水は行わない。
（３）かん水は、気温の低い時間帯に短時間で行い、ほ場全体に行きわたったら（土壌の色が変わる程度）速やかに排水する。

なお、気象庁から「熱中症警戒アラート」が発表されるなど、熱中症の危険性が極めて高い気象状況になる場合は、体調管理に十分に注意してください。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

			低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信地方	向こう１か月 08/13～09/12	20	30	50
		１週目 08/13～08/19	20	30	50
		２週目 08/20～08/26	20	50	30
		３～４週目 08/27～09/09	20	40	40
降水量	関東甲信地方	向こう１か月 08/13～09/12	30	30	40
日照時間	関東甲信地方	向こう１か月 08/13～09/12	40	40	20

7月～8月は「農作業中の熱中症による死亡事故」が集中します。

夏の農作業で、以下のことに気をつけましょう。

- 日中の気温の高い時間帯の作業は控えましょう。
- こまめな休息、水分補給を行いましょう。
- 体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断しましょう。

農作物には登録農薬を使用し、使用基準を遵守しましょう！

①農薬容器のラベルをよく読み正しく使う
②農薬の飛散防止を徹底する
③農薬の使用状況を正確に記帳する